

国際収支(表)の概念と分類方法

1996年3月1日：日本における国際収支表発表形式変更

balance of payment

17Cまで(重商主義の時代)：balance of trade

→今日では、「貿易収支」の意味

☆一国の

貿易収支=輸出-輸入

$B=X-M$

$B=0$ → 貿易収支が均衡

国際収支表の作り方

戦前型

貿易収支と貿易外収支

戦後型(IMF型)

IMF国際収支統計マニュアル：1948年～

→ IMF月報に各国の国際収支が載るように

1993年：IMF国際収支統計マニュアル第5版

なぜ改訂されたの？

サービス貿易の増大、金融・資本取引の自由化

→従来の収支概念の陳腐化

統計の国際的調和

→ IMFとSNA(system of national accounts=国民経済計算)体系

SNAはGDPなどの指標計算の基準

国際収支統計の基本原則

1 居住者と非居住者の区別

→どこから対外取引とするのか？

→1年ルール：1年以上海外に出ている者

2 複式簿記の記入原則

経常取引の場合

→受取：貸方、支払：借方

資本取引の場合

→資産の減少・負債の増加：貸方、資産の増加・負債の減少：借方

ex. 日本企業が米国企業に100万ドルの輸出

→貸方：輸出100万ドル(貿易収支)

→借方：対外債権の増加100万ドル(資本収支)

というわけで、国際収支に黒字も赤字もない

3 発生主義

輸出した時点と、支払いの時点は異なる

→輸出が行われた(発生した)ときに、支払いも行われたとする

経常収支と資本収支を分ける意味合いはあるのか?

☆経常収支の大きさ←相対価格(物価：内外価格差)

☆資本収支の大きさ←内外の金利差、債権収益率の差

国際収支統計の主な変更点

プリント参照

☆国内発表は円建て表示のみ(かつては、円・ドル両方で)

☆報告省令レートの見直し→過去1ヶ月の平均(かつては、過去6ヶ月の平均)

貯蓄・投資バランス論と国際収支発展段階説

経常収支はその国の産業の国際競争力を表している、場合が多い

→例外：地下資源輸出で黒字(産油国)、サービス収支で黒字(イギリス)

国民所得：Y

消費：C

投資：I

輸出：X

輸入：M

貯蓄：S

$$Y=C+I+(X-M)$$

$$S=Y-C$$

$$\rightarrow S-I=X-M$$

S-I：貯蓄・投資バランス

X-M：経常収支

$$S=I, X-M=0$$

S>I, X>M：貯蓄超過なら経常収支は黒字

S<I, X<M：投資超過なら経常収支は赤字

このことから、

一国の経常収支の黒字や赤字を規定するのは、

長期的に見るとその国の貯蓄率だよ!!

つまり、S-Iのバランス(経済構造)だ!!
と、いえる

だから、
為替レートをいじって国際競争力を調整し、
経常収支黒字を解消しようとするのは、
短期的には効くかもしれないが、長期的には効かない・・・

参考書 25P
国際収支発展段階説
ライフサイクル仮説を応用したモノ
→最近はあんまり流行らない

国際収支に関する諸問題
☆最適通貨圏の理論
R.A.マンデル 1968年

マンデル=フレミング・モデル
まだ、固定レートの時代に、「変動相場になった場合、金融政策はどうなるの?」を考えた

カナダとアメリカを設定(図参照)
→自動車産業と、木材産業
仮に自動車産業が停滞、木材産業が隆盛したらどうなる?
→東部では失業で赤字、西部はインフレで黒字

だが、金融政策がうまく行かない!!
→金利を下げたら、東部は助かるが西部のインフレはさらに上昇!
→金利を上げたら、西部のインフレは抑えられるが、東部の失業率は上昇!
なぜか?通貨圏と産業圏が一致していないから・・・

国際経済の枠組をどう考えるか?
→ $Y=C+I+(X-M)$ が本当に国際経済を表していると言えるのか?
一国経済のなかから、針穴を通して外を見ているだけじゃないのか?

文献紹介
R.A.Mandell 「international economies」1968年
渡辺・箱木訳 「国際経済学」ダイヤモンド社 1971年

国際通貨制度の歴史
1880年前後：国際金本位制

1947年：IMF体制(固定レート)

1971年：金ドル交換停止

為替フロート(変動レート)

各国がどのような方式(為替相場取極)を取っているのか?

→ IMF加盟190余国のなかで、為替フロートを採用しているのは40～80カ国